

佐渡の四条金吾

一

文永十年の五月の或る日だった。

佐渡の五月は、曆の上では夏ではあるが、まだ金北山の山肌には一すじ二すじの残雪が残っていた。

ここはその金北山の登山道にあたる、石田の郷の一の谷さむと言う処であった。西と北が小山になつていて、冬の強い西風がふせげる、佐渡としては、比較的暖かい冬のむかえられる結構な所である。

大聖人は今この一の谷で鎌倉から遙々と尋ねてきた、四条金吾と対談されているのだった。

大聖人が、塚原の三昧堂から、なぜここにうつられたかと言うと次の如くであった。塚原三昧堂での俗に言う塚原問答が、大聖人の勝利に帰すると、塚原という所が国府に近いのにもかかわ

らず、塚原に多数の大聖人への信者ができたので、国府の役人は、これに驚いて、国府から二里程はなれた、この一の谷に移したのであった。

だが一番国府の役人が驚いたのは、問答の一月後に、天台宗叡山の学匠で、この佐渡の島に流罪の身となっていた、(註一)最蓮坊という僧侶が、自ら進んで大聖人さまの弟子となったことであつた。最蓮坊は大聖人さまより、日浄と名を賜わり、大聖人より御書を賜わること、生死一大事血脈抄外七の御真書が現存しておる程である。これをもつても、如何に強信であつたかが伺われる。最蓮坊の捨邪帰正は、佐渡島の念禪その他の僧侶に大打撃をあたえたことは十分に察せられる。その証拠には二月に最蓮坊が入信して、四月早々に塚原から一の谷に大聖人はうつされておるのである。

一の谷の大聖人のおすまいは、佐渡の代官本間六郎重連の一族の名主で、その屋敷に阿弥陀堂をたてて、唱名念仏にあげくれた人なので、一の谷入道と呼ばれる人の館であつた。

念仏無間地獄を唱える大聖人が、大の念仏屋の所に、あずかり人となつたのだから大変なことであつた。

この当時の島の流人は、前述したことであるが、一か年の生活費は官給であつたが、それがすぎると、自営自活せねばならなかつた。当時の掟として農耕に従がわねばならなかつた。

だから、一の谷入道の大聖人さまに対する待遇は最初はともひどいものであつたらしい。

「預りよりあがる食はすくなし、つける弟子は多くありしに、僅の飯の二口三口ありしを或はお盆（折敷）に分け、或は手に入れて食いしに」（全集二三九ページ）

と言う御手紙を拝すると、官給以外の食を大聖人に御供養しなかつたように、最初は思われる。日興上人は大聖人とともに、佐渡に渡っておつたのだから、「つける弟子は多くありしに」の中には、勿論日興上人もはいつていたことであろうが、一人の官給食をたまには、大勢で食したことを書かれたことと思う。

しかし、弟子達も、やがて農耕に従事して大聖人の食生活には、佐渡の信者の外護もあつて、ことかなくなつたであろうが、一の谷早々の御生活は苦るしかつたに相違がない。しかし、一の谷入道も、大聖人さまに接してゐる中に、いつしか感化されて、世間態を考へて表面には念仏をすてかねても、内心では大聖人に信服するようになった。それは、入道の妻や子供が、本気で大聖人さまに帰依した感化もあつたのであろう。

大聖人が一の谷に移られてから、子供を背かつて鎌倉から、態々大聖人をたずねた一女性があつた。暫らく滞在して、大聖人や弟子達の身の廻りを世話して帰つていったが、大聖人は、大変に感動せられて、この女性に「日妙聖人」と名を賜つた。女人の身として生前中に聖人号を賜つた人はたんとない。故に「日本第一の法華經の行者の女人なり」とこの女性に讚歎の言葉を、大聖人は賜られておる。

日本第一の法華經の行者の女人なりと、大聖人さまからおほめを頂戴した日妙聖人も、いよいよ佐渡から帰る時には、路用の金子がなくて、大聖人さまの紹介で、一の谷入道から、借金しておるのも、人間味あふれる話だと思う。入道も路用の金をやくだてるような人になつたのだから、内心では大聖人に帰依していたのであろう。大聖人に接しての間は、信心があつても、大聖人さまが佐渡から鎌倉に帰られるようになると、世間態を考えて、念仏をどうしてもすてかねるようであつたことは、大聖人さまが、四年後の建治元年に、一の谷入道の妻に与えた手紙に、入道の信仰の不徹底さを戒めた書状があるのでもわかる。

「吳子（註二）によれば戦争の起る原因を五つに分けています。第一に功名心から起るもの、第二は所有欲から起るもの、第三は憎みあうことから起るもの、第四に、内政の紊乱びんらんから起るもの、第五は民の生活の窮迫から起るものであります。この原因によつて發生する戦争は、その挙兵の目的からみて、義兵、強兵、剛兵、暴兵、逆兵の五兵に分けることができるが、義兵は礼を厚くして和を講ずれば、彼は義の名を失うので戦いをやめる。強兵にはあえて抗争せず、貢物を贈つて一たんは屈し、好機をまつべきである。俗に負けるが勝ちとはこれを言うのだが、剛兵に対しては外交辞令をたくみにして、その怒りをやわらげ、激突をさける。暴兵に

は戦わずしていつわり逃げ、その掠奪りやくだつに酔えるとき、逆襲してこれをほろぼす、逆兵に対しては術作をもつてこれをおさえる等々あるが、金吾殿、蒙古の来襲はこの戦争の五田、五兵の中のいづれに当たると思われますか」

四条金吾は大聖人の顔を見上げると、

「さあ私の如きものは……」
と言葉を謹んだ。

「貴公、それでも、鎌倉武士と言われるか、自分なりの所存を、国難を前にして言えぬとは申させぬぞ、どうじやなあ」

言葉とは反対に、大聖人は微笑えみを顔にたたえておられた。

「では申し上げます。今度の蒙古来は孫呉の兵書などには、のせることのできない、未曾有の戦いと存じます。支那四百余州と申しますが、如何に大なりといへど、やはりそれは支那一国内のみの戦い、一国内の戦いを論じたのが、孫呉の兵書であつて、遠く海をこえて、この日本の国に押しよせるという蒙古国の野望は、孫呉の兵書では、その意図が、はかりかねると存じます」

「そう私も思う、呉子の言う所の、戦争の五田、五兵の意味も分かるが、これを全部含めたものが蒙古の拳兵ということが出来よう。しかし、わが国が、この蒙古をどううけとるか、呉の兵法にもない。昔神宮皇后が、三韓を攻めたと言う話は聞いておるが、わが国が他国から攻められ

ると言うことは、未曾有の事で、この日蓮が九か年前に、立正安国論に予言したが、幕府は天下を騒がす大逆人として日蓮を遇し、伊豆の伊東に三か年の流罪を申しつけ、いよいよ蒙古来確實となつて、天下、国家の論を統一して、これに当たるべしとして、十一か処に蒙古来を告げて、その対策の問答をとげようとしたが、却つて、このことが、竜の口の首の座となつた。金吾殿、あの時は、貴殿は本当に鎌倉武士であつたなあ」

「いや、めめしい鎌倉武士でありました。ただ、泣くより外にてだてを知らなかつた」

「これ程の喜びを笑えよかしか……」

「聖人さま、それを言われると恥かしくて、この金吾、竜の口では本当に聖人さまの後を追つて、腹かつさばく覚悟でございました。あの時も今とてもその覚悟に変わりはありません」

「ありがたいことです。日蓮も心から今改めて御礼を申し上げます」

「蒙古が支那四百余州を攻めおとして、わが日本国に攻めこむと言うことは、一体どういふつもりなのでしようか」

「蒙古の意図する所は一応国書に現われておるが、日蓮はそうはとらない」

「ではどういふふうにお考えですか」

「それは、一閻浮提第一の本尊が、この国に立つ証明のために元軍数十万の来寇という事実が、是非とも必要なのだ」

四条金吾は、思わず大聖人の顔をみつめるのだった。大聖人は先程と変らぬえみをたたえたお顔であった。金吾は思った。

常に大聖人は「仏とは末法においてわれ等凡夫のことなり」と我々に教えて下さっていたが、「一閻浮提第一の本尊が、この日本の国に建立されるために、元軍の来襲が必要なのだ」と断言せられた時、「ああ、この御方こそ末法の、生ける仏様なのだ」と確信した。

(註一) 文永元年三月に比叡山の僧侶が自分の寺即ち延暦寺を焼き、五月には三井の園城寺の戒壇をやくという大事件があった。この災厄の罪をおつたものか。

(註二) 呉子、約二千四百年前河北省に生まれた兵法家

一一

大聖人が開目抄をあらわされて、人開顯(註一)をいたし、次の年、御年五十二歳の時、本尊抄を著されて、末法の衆生のたよるべき本尊を明かにされたのは(註二)文永十年の四月二十六日であった。四条金吾は法門ふれ頭からその御法門を伺うと、じっとしておることが出来ずに、五月下旬、佐渡一の谷さわにおられる、大聖人をおたずねしたのである。

五月といつても佐渡はまだ寒い。大佐渡の金北山には一すじ二すじの残雪が、陽光をうけて、青ぐろい山肌に、きらきらと光っていた。

一の谷は、名の示すとおり、谷間にあるので、佐渡としては、暖かい場所といってよからう。西の崖下には、つばなの白い穂が風にゆれていた。

四条金吾は、大聖人さまの一言に肅然しゆくぜんとして、膝を正すと、思わずききかえした。

「一閻浮提第一の本尊が、この日本の国にたつためには、蒙古の襲来が必要と言われるのですか」

「さよう……」

大聖人は静かに返答されて、観心本尊抄の一節を、口にされた。

「今の自界叛逆、西海侵逼しんひつの二難を指すなり、此の時地涌千界出現して、本門の積尊を脇士となす、一閻浮提第一の本尊此の国に立つべし、月支震旦に未だ此の本尊ましまさず……」（全集二五四ページ）

四条金吾はただただ、その御金言を拝聴していた。

「既に自界叛逆の難は、去年の二月鎌倉と京におきて、（註三）日蓮の予言のむなしからざるを示した。そして私は、去年の十月二十四日に、弟子の日興が丹精こめて筆写した、立正安国論の裏に、文永九年本歳十月二十四日の夜の夢想に曰く、来年正月九日蒙古治罰のため相国より大小向

う等云々(註四)

と書いたが、本当に、日本国の国状が、そうなたたではないか金吾殿……」

ここで、蒙古のことについてのべるのが順序と思うので話をかえてみよう。

大聖人の竜の口法難は九月十二日と思いいこむ人もあるうが、正確に言ううと九月十三日の午前十二時から三時迄の出来ごとと言うことが出来る。

その文永八年九月十三日づけをもつて、肥後の玉名郡野原庄(現在の荒尾市)の地頭、武蔵の国の御家人小代右衛門、又鎌倉在住の二階堂氏、薩摩の阿多庄(現在の加世田市内)の地頭に、

蒙古人襲来すべきの由、そのきこえあるの間、御家人等を鎮西にさしつかわす所なり。早速に自身、肥後の国の所領に下向し、守護人に相伴い、且つは異国の防禦を致さしめ、且つは領内の悪党をしずむべきもの。仰せによつて執達件のごとし。

文永八年九月十三日

相模守時宗

連署 政村

と御教書が出ておる。これは、高麗の国使の書状が、文永六年の八月の初めに太宰府に達し、太

宰府から、鎌倉に到着していたからである。高麗の国使が、何故蒙古が日本を攻めるということを、日本に伝えたかと言うと、蒙古の圧力にもよったが、そうしなければならぬ実には国内の事情があつたのである。それはすでに蒙古軍が高麗の首府の開城に到着したのが、文化八年の正月十五日であつて、三月三日には、忻都將軍の率いる蒙古軍の増援隊が到着した。そして蒙古軍が高麗で軍事行動を起こした。それは当時高麗に抵抗していた叛乱の徒軍を珍島（朝鮮半島の南端の島）で、三万の蒙古軍が、男女合わせて一万人をほろぼし、その残党は済州島（朝鮮木浦の南百四十軒）に逃亡したので、完全にこれを亡ぼしたのは至元十年——我が国の文永十年の四月——であつた。

叛乱徒軍の滅亡によつて、高麗国内も安定したので、いよいよ蒙古軍の日本襲来のお手伝いを、高麗国がしなければならぬ時がきたのである。

ところが蒙古の日本襲来となると、高麗が、出発の基地となることは当然なことである。

軍兵の提供四万人、船艦の建造一千艘を高麗は蒙古から要求されたが、一万人の徴兵がやつとである、こまる、こまるの冗談なぞいつておられない時であつた。

蒙古の日本遠征となれば数十万の蒙古軍が高麗にくる。その食糧は高麗がまかなわなければな

らないことが条約中に規定されていた。これは大変なことである。筆者も第二次大戦の時、二等兵で支那におったが、最前戦線に百俵の米をおくるためには千俵の米を送らなければ、とどかないと言われたが、なぜ、そうなるかをつぶさに体験した。

船はつくれ、徴兵を出せ、食糧はそっちもちときたんでは、蒙古が攻めるのではなくて、高麗が、日本を攻めてるようなものである。それでいて高麗国の存在などは蒙古はみとめておらないのも同然だからたまらない。

そうならないためにはどうしたらよいか、蒙古が日本を攻めなければよいのだ。そのためには蒙古のこわさを、日本国に知らしめて、日本が蒙古の命令をきいてくれればよいのである。そうすれば、高麗は、船もつくらなくてよし、数十万の兵隊に田畑を食いあらされることもないのである。

そこで日本に高麗からの第五回目の使者をたてたのである。前述したとおり、それは至元八年（文永八年）の正月十五日に、高麗国の首都に、蒙古の日本への使者、趙良弼ちやうりやうびつが蒙古軍を率いてきておったので、趙良弼が日本にゆく前に、高麗の使者が日本にきたのである。（富士巻の三）の一七九ページ参照

なにしろこの趙良弼というのは、蒙古国王からお前は使者としては年をとりすぎているからやめたがよいと言われた時に「絶域に死すとも、うらみなし」と自ら進んで使者を希望したという

程の人間である。時に良弼は五十三歳であった。この良弼が日本にゆかない以前に、高麗の使者が日本に到着して、蒙古のおそろしさを、日本に知らせなければ、自分の国にも不利と考えたので、良弼より一か月早く日本に到着した。それが文永八年の八月であった。だから文永八年九月十二日の夜には、時宗は良弼の蒙古使節が九月六日に高麗の金州を発したことを知っていたのである。

高麗の使節は第五回の日本説得に失敗して帰っていったが、良弼の一行はそれとは関係なく、文永八年九月十九日博多湾の西、今津の浜に百余人の多数で上陸し、直ちに太宰府に至り、国書の持参をつげた。

良弼は太宰府の守護所において「国書は王宮に持参して、帝王にたてまつるべし、それがかなわぬなら、時の將軍に伝えて参らすべし、その儀なければ、持つて帰るべし」と強く言つて又文書を以つて、この議がいれられなければ、自分は死んでも郷国に返らないと、当まさに自ら首を切るから、伏して照覧を願うと書いて、至元（文永）八年九月二十五日、使西四州宣撫使小中太夫秘書監国信使趙良弼（註五）としたため、決意の程を示しておる。太宰府では先例にしたがい、一行の上京を許さなかつた。

国書は辛櫃かうびつに納めて、金の鎖くさりでしばつてある程の嚴重さであるが、国書も使節も太宰府が受けつけないというのでは、いくら威張つてみても反応がないので、仕方なく国書のかきうつしを

出して、十一月迄に返答ありたい、さもなければ、一戦あるべしと断乎と言わしたのであつた。

国書の写しは次の如きものであつた。

蓋し聞く、王者は外なしと。高麗と朕とは、すでに一家たり。王の国は（日本を指す）実に鄰境たり。ゆえに、かつて信使をして好を修めしも、疆場の史（太宰府の役人を言う）のために抑えられて通ぜず。うるところの二人（註六）は有使に勅して慰撫し、牒をもたらしめてもつて還らしめしも、ついにまた寂としきくところなし。ついで通問せんと欲せしも、たまたま高麗権臣林衍、乱をかまえ、これに坐して果たさず。あに王もまた、これによりて、やめて使をつかわざりしか、あるいは已につかわせしも、中路にて梗塞（ふさがること）せしか、みな知るべからず、しからずんば、日本はもとより礼を知るの国と号す。王の君臣も、いづくんぞあえてみだりに思わざるの事をなさんや。近くは已に林衍をほろぼし王位を（高麗の国をさす）復旧し、その民を安集せり、とくに少中大夫秘書監趙良弼に命じて、国信使にあて、書をもつて往かしむ。もし即ち使を發し、これとともにきたらば、親は善隣にして、国の美事なり、それ、あるいは猶予をし、もつて兵を用うるに至りては、誰か樂しみてなす所ならんや。王、それ審かにこれを図れ。

文永八年の九月二十五日に、良弼は自刎の決意でこの国書の写しをさし出しているのであるが、蒙古襲来を九か年も叫びつづけて、遂にそのために首の座に登った大聖人の九月十三日から丁度十三日目の二十五日であるのも不思議でないか。さればこそ、大聖人が竜の口法難後約二十八日間も、依智にとめおかれたのは、大聖人の予言の通り日本の国状が動いて、一寸幕府もその決断に迷った証拠である。前出の国書を読めば最早蒙古襲来が動かすことの出来ぬ現実となったことがわかるのである。

我が日本国は神国にして古来より みつぎもの 貢を異国に致したことがないという国是に少しも変わることはなく、良弼はむなしく日本を去らねばならなかったが、この時に来朝にあたって対島あたりからつれてきた弥四郎という男の外に、十二人の日本人をつれ去ったのであった。

良弼の一行は、至元九年（文永九年）の正月十八日に、高麗の国についておる。

良弼の伝によれば、良弼の日本に対する態度が強硬だったので、太宰府が十二人の日本人を使節としておくれたように書いておる。

しかしながら我が国の反牒をもっていないのだから、この十二人は使節でないことはわかっている。だが、良弼が太宰府で拒絶に合うと、「大將軍兵十萬を以つてきたり書（日本の国書）を求む。良弼曰く汝の国王をみず、むしろ我が首をもつてされ」の威圧にあつて、太宰府官のはから

いで黙認という形で日本人十二人を渡したのであろう。その証拠には日本人十二人とあつて、一行の姓名すら弥四郎以下十二人だけとしか分らないのである。

高麗についた良弼は高麗にとどまつて、日本遠征の準備にあつた。この年の八月に高麗国は、蒙古軍の屯用軍に対する供給の痛苦を蒙古に訴えておるなぞのことがあつたので、その督戦をかねて彼は蒙古に帰らず、書記官張鐸ちやうたくというのが、随行の使者二十六名と弥四郎以下十二人をつれて燕京（現在の北京）に到着して、国王忽必烈ふびらいに謁見を願つた。

「去年の九月、日本国人の弥四郎らと共に、太宰府の西守護所にまいりました。ところが太宰府の役人は、前から高麗にあざむかれ、しばしば蒙古国の来征が伝えられたと申しました。しかし皇帝が生を好み、殺をにくんでまず使人をよこして国書を下示されようとはどうしても考えられません。しかしながら王京は、ここ太宰府を去ること。なお遠くにあります。よつて、まず人をつかわし、奉使にしたがつて回報いたさせたいと思います。こう申してここに十二名の者を伴つてまいりました」

と報告したのだが、蒙古国皇は十二名が反牒をもつてないのだから、高麗がなんと言おうと張鐸の口車にはのらず、十二名の日本人を正式の使者とみとめず、臣家たちも、

「まことに聖算の（皇帝の考え）の通りです。日本は、われらが兵を加えることを恐れているに

違いありません。よって、この連中を出して、蒙古の強弱をうかがおうとしたのでありましよう。まずは、これに寛仁を示すべきであります。ただし入見をゆるすべきではありません」と意見を申し上げた。

張鐸の願いは却下され、三月七日、蒙古国王は中書省に下して、弥四郎以下十二名の日本送還を命じ、張鐸は四月七日十二名の日本人をつれて、高麗の使者と共に日本に向かった。五月太宰府に達した。関東評定伝に「五月張鐸帰り来たり高麗の状を又持ちきたる」とあるのがこれを書している。

しかし、決意をすでに固めていた日本政府の出先機関たる太宰府はこれらを一向意にせず、十二名を受けとると、早々に張鐸の一行を追い返してしまった。

この張鐸来朝の時に趙良弼は再び高麗から一緒に日本にきた。張鐸は追いかえされたが、良弼は断乎として太宰府にとどまって、蒙古国の強大さを誇り、これに屈伏することを説き、すでに高麗国には蒙古軍が二万人高麗軍が八千人、船は千料船（千石を積むことのできる大船）三百艘、快速船三百艘、汲水小舟三百艘合計九百艘の用意が出来ておると、軍事上の秘密まで打ちあけて、太宰府の役人をおどしたが、太宰府の役人は一寸も驚ろかず、良弼は京にも登ることも出来ず、翌年の文永十四年の三月空しく高麗に帰っていったのである。

五月都に達した趙良弼は、蒙古王フビライに拝謁を賜ったが、国皇は良弼が、日本にとどまる

こと一か年有余をほめて、「汝は君命をはぶかしめずというべし」という褒賞の言葉を賜わり、また良弼も、このとき、日本君臣の称号、州郡の名数、風俗、産物などに関する覚え書きを献上し、最後に次の言葉をつけ加えた。

「臣は日本に居ること一年有余、その民俗をみるに狼勇（こじゆう）（心ねじてあらつばい）にして殺をたしなみ、父子上下の礼を知らず、その地は山水多くして、耕桑（田畑）の利なし、その人を得ても役すべからず、その地を得ても富を加えず、いわんや舟師にて海を渡るは、海風も期なく、禍害も測ることなし、これ有用の民力をもつて、無窮の巨谷をうづむるがごとし、臣おもえらく、うつことなかれ」と答えたのである。

良弼が日本に一年有余滞在して、つぶさに日本の国状を視察して、今度くる時は、十万の大軍をもつて日本に襲来すると断言して帰ったのが、文永十年の三月であり、「一閭浮提第一の本尊この国にたつべし」（全集二五四ページ）と断言された観心本尊抄が著述されたのは、その年の四月の二十六日である。世界の殆どどの国を征服し、世界未曾有の一大帝国を建設した元軍が日本に來襲することは、最早時期の問題となつたのである。世界最強の物質力をもつて、日本の国を攻めてくるのである。これに對抗し、この物質力を打ち破るものはなんであろうか。これを大聖人は六万巻の法蔵にもとめたのである。その結果が、

「其の後九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之れ有る由・風聞す等云々。経文の如くんば彼の国

よりこの国を責めんこと必定也、而るに日本国の中には日蓮一人当に彼の西戎さいじゆ（蒙古をさす）を調伏するの人たる可しと兼て之れを知つて論文に之を勸う、君のため国のため神のため仏のため内奏をへらるべきか、委細の旨は見參を遂げて申す可く候、恐々謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮判

宿屋左衛門入道殿

（全集一六九ページ）

の決意となり北条時宗に書を送つては、

今日本国既に蒙古国にうばわれんとす。豈歎かざらんや豈驚かざらんや、日蓮が申すことお用いなくんば定めて後悔之あるべし、日蓮は法華經の御使い也、經に曰く「則ち如来の使如来の所遣しよけんとして如来の事を行ず」と、三世諸仏の事とは法華經也（全集一七〇ページ）の言葉となつたのである。如何に蒙古退治を自負せられたかが察せられる。

それは何故か、

「汝なんぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや、答う上にあぐる所の經釈を見給え私の儀にはあらず、釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給えり、末代今の日蓮も仏と天台との如く法華經を以て本尊とするなり、その故は法華經は釈尊の父母諸仏の眼目なり、乃至今能

生を以て本尊とするなり」(全集三六六ページ)

大聖人自身が生ける法華経なのである。この自覚におかれて、我れ日本の柱であり我れ日本の大船であり、我れ日本の眼目なのである。そしてまた日蓮が慈悲広大なれば南無妙法蓮華経は万年の外未来迄もながるべしの仏の慈悲となるのである。

この末法下種仏法の仏さまは、南無妙法蓮華経——日蓮であるが故に、この時地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となし、一間浮提第一の本尊この国に立つべしとの実現となるのである。

この本尊所立の国が、なんで単なる人間のあくなき野望の権化たる蒙古国なんぞによって亡びようか。世界未曾有の本尊所在国の威光を示すためには蒙古襲来という兵革の災が必要なのである。しからずんば、日本人の眼をひらくことができないのである。末法万年の衆生もかかる厳粛な事実をみて、はじめて、その大聖人の下種仏たる由縁を知ることができるのである。大聖人は自ら書かれている。

「仏法の邪正乱れしかば王法も漸くつきぬ。結句は此国他国にやぶられて亡国となるべきなり、此事日蓮独り勘え知れる故に仏法のため、王法のため諸経の要文をあつめて一卷の書を造る。よつて故最明寺入道殿に奉つる。立正安国論と名づけき、其書にくわしく申したれども愚人は知り

難し」(全集二七一ページ)

大聖人が立正安国論を著述された文応元年こそ日本に來襲の総大将たる蒙古国王フビライが即位をした年であることも、またさかのぼって建長五年四月二十八日は大聖人の宗旨建立の日であるが、その建長五年に蒙古国が二十三か年費して古高麗を亡ぼして、高麗国の親政をにぎり、高麗国の諸処に蒙古の代官をおいて、日本襲來の態勢を整えたのが、実に宗旨建立の年であった。また大聖人が、蒙古來襲を予言した書、立正安国論を著述されるために駿河の国の岩本の実相寺に一切経を閲覽された、正嘉二年の年は、宋国への攻撃を蒙古が始めた年であった。彼我对照して話をすすめたら、意外な一致が沢山あるが、既のべたことであるから之を略そう。

「この故に蒙古の襲來は既に決定せるところであるが、金吾殿、安心せられよ、この日本国は日蓮がひかうればこそ必らず安泰ですぞ、それは、未曾有の本尊がこの国にたつからです」

金吾は大聖人にたずねた。

「……それは何時でございましょうか」

「時機か……左様、日蓮がこの佐渡の島におる間は、我が心中はともかくとして、世間からみれば、いまだ流人の身である。流人の身では、それをあらわしてみても、世間の眼からみれば、

笑いものである。金吾殿」

金吾は大聖人から声をかけられても返答に迷った。

「……………」

「金吾殿、今にこの越後の国司が、家来あまたつれて、この私に鎌倉にお帰り下さいといってくる日がききまずぞ、それからのこと」

「それはつ何時でございましょう。この佐渡の島に流されては、おそれ多くも、一天万乗の君にまします順徳天皇すら佐渡の土とられました。いまだ帰ってきた人のないこの流人の島、佐渡でございしますが、鎌倉にお帰りの国がくるのでしょうかお聖人さま」

「必らずその日がききまずぞ、頭の白い鳥がとんできたらなあ」

「御冗談を申される、頭の白い鳥なぞはおりません」

「そうかなあ、昔丹^{たん}太子という人が秦の始皇帝の人質となっていた時に、鳥の頭が白くなったらかえしてやろうと言われたが、本当に白い鳥がとんできて、赦るされて国に帰ったと言う話があるから、とんでこないことでもないぞ、一年ぐらいまつたら、どうじや、四条金吾殿……」

呵々一笑せられる大聖人、この人が流人の身かと、その笑い声に、四条金吾は思わず我が耳を疑った。

(註一) 開目抄を人開頭という、大聖人が末法における我等の主師親たることを示す書なるが故に。

(註二) 本尊抄を法開頭という、末法における我等がたのむべき法即ち本尊を示された。

(註三) 北条時宗が兄時輔と甥の時章教時を殺した事件

(註四) 静岡県玉沢妙法華寺に現存、大小向うべしとは軍隊が出るの意味

(註五) 「元寇の新研究」竹内宏著

(註六) 対島の人二人を捕えていったことをさす